

のよみたる歌はいまだ聞かず。

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人のこのため

これこそ馬のよみたる證歌さうよ。これは業平のにはなきか。念もない熊野にそも此歌と申すは、長岡にすみたまう老馬のよめるうたなりとこそ。

○三好中納言殿にて大名衆に振舞あり。朝食過ぎ、酒二三返とほれども、つひに末座にある藝者に膳をすゑず。其時申すやう、殿様達飯を参りて候へば、早々我等ごときの者にふるまひを給はるは、古より定まれる時宜で御ざあると。其時宜をば更にきかぬと中納言殿仰せあれば、楊貴妃に、君きこしめされつゝ、いそぎめしだしと御座候は。

○かたのごとくの下手工、能を見物に行きける時、わきが出でて、津のくに高砂の浦をも一見せばやと存候といひければ、かの大工ひたもの感じ居るを、左右にある者ども、こゝな者は何事をうなづくやらんと聞けば、友達にむかひ、われは高砂の浦を見て、ひろいとばかり思ひたるに、今の人は一聞せばいとうたはおもしろい、何にも餘分をおきてさげすむべきものなり、これぞ後學やとて、はたはすかんじごとは。妙な聞きやうや。

○蠟をつけたる馬二疋京へのぼる。山中の關にて、役をせよといふ。いや昔より惣じて蠟をつけたる馬に、役をしたるためしなしと、互に爭論なかばなる砌、沼の藤六とほり合せ、雙方の理非を聞き、

向後はともあれ、まづ此度は役をゆるせ、幸關寺にらうに、はやくもなしとあるぞ。

○昔は番匠の持つ鉏も物をいうたとあるが、今は聞かぬの。そのやうなるうそをばいづくにて聞かれたぞ。高砂に、しかるにちやうのうがことばにもとありごとはある。

○三五夜中の新月は宵よりくまなき空の色、ねられんものか、いざゆかんなほざりならずうちとけて、語る宿にぞあつまりぬ。亭しらかゆを煮て出せば、月海上に浮かんでとは、興をもよほしほめにけり。少時程ありすひものに、鰻調味しすゑたれば、あひにあうたるもてなしや、月海上に浮かんで、うなぎも浪をはしるか、申せし人のゆかしさよ。

○楊貴妃の能に、大夫がしるしの簪をとかんとするに、面をゆうたる糸にむすばれ、終にとけず。せんかたなければ、面ともにとりそへてわたす。わきが二いろを手に持ち、しるしのかんざし面までたまはりとうたひごとは。太夫のすがほ如何候はん。

○京の丸山といふ處に人あまたあそびける。ふるまひの菜に醬出たり。風味ことに勝絶なり。このひしほといふ物をば、誰がたくみに作りそめつるやといふ。これこそかくれもない融の大臣より出來そめたるものよと。なにぞふみに書いてあるか。なか／＼すなはち融に、浦は其のまゝひしほとなつてと。

○奥州にみてぐらといふ武家あり。彼の館にて能に鐵輪をしかり、おそろしやみてぐらにといふ



を、ゆきあたり俄になほし、おそろしや股に三十番神おはしますと。淺ましき神の居どころや。

○津のくに海士が崎にて神事能あり。野の宮をする時、うらがれの草葉にある、をかゆるとて、たてがれのくさばにある、とうたひしも、うらめしき作分や。

○錢を貸したる人の方へ、年のくれに使をつかはし乞ひければ、返事に三年四年利分をなしたり。もはやそなたの物をばおはぬといふ。貸主大に腹立し、對顔して本利ともにすませと。いや利分ばかりにてすまされよ。尺迦の時代から本利ともにす事は無い。それは何としたる存分ぞや。されば熊野に、佛ももとはすてし世の作り、もとなさねば、佛さへゆるされたはさて。

○和泉の堺に山本雅樂とて小鼓の上手あり。幽閑法印政所なりし時能あり。法印彼雅樂をまねき、そちは三輪をうたれよ、三輪の山もと、あるなれば。言下に、かたじけなや、ことによりて見たれば、うたなりと申せしはしほらしや。

○實盛生國はといふ。一向すまぬ。何というがよい。さねもり生得は日本にてあると。  
○卒都婆小町に垢膩の垢づけると。これもわるい。くに、まもあかある物か。五體の内にもよくあかのある所は、うなじなるま、くびのあかづけるがよいと。

○千手重衡に雪のふる枝の枯れてだにと。これこそでもない事よ、よきのふるえとこそうたふべけれ。

○信長公へ客あり。御膳出づるに、是は一段をさうなる仕立やと仰せらる。折節連一候て、昔より大名のきこしめす物は、そさうなるが本と聞えて、兼平に、口惜の君の御振舞や候と申せしに、判官これをきこしめしと。

○和泉の國萬代の八幡にて能あり。實盛をしけるが、あつばれおのれは日本一の剛の者というて、きつとかたはらを見る。同じならびに國府の清水とて名所あり。又ならびの在所にくろどりといふあり。年ふけたる男我事を云ふかと思ひ、いやおれはがうの者では候はぬ、くろどりの百姓ぢやと。

○江口はよき謠なれど、其さまをいやしうつくりてわるい。江口の君の幽霊までは大事ないが、こゑばかりしてうせにけりが農人のやうなと。

○當世は刀脇差數寄道具につけ、なにもみなにせ物あり。手苦勞物がはやるといふものがたり出でければ、今ばかりではなし、むかしよりある事なり。人間の噂はおきぬ、佛の上にさへ似せものがあつたればこそ、當麻に正身の彌陀如來げに來迎と作りたるはと。

○せいくわんじの阿彌陀は、いかなるみそぎにてか造りたるらんといふ人ありしに、櫃の木にて作りたるは。何として知りたるぞ。かくれもない誓願寺の謠に、春日の明神の御作とかや。  
○我はこのほど齒がぬけたとてかなしめば、齒のぬくるは命の長からんしにてあると書たるは。いかなる書物にあるぞ。關寺小町に、おちても残りけるは露の命なりけりと。



○宿老たる主人の前にて、關寺を所望せられ、いとしく老の身のこはりゆく果ぞかなしき。  
 ○能登の徳宥といふ人のもとにて、海士をうたふに、今此經の徳祐にてをやれと思ひ、徳祐さまとなほし事は。

○太閤秀吉公聚樂にて能を御沙汰ある時、本因坊見物する棧敷へ、雄長老狂歌をおくられし。  
 碁盤まで本因坊が能を見れば目は白黒くなりぬべきかな

舞

○人あまた朝食により合ひぬ。中に一人夕の大酒に、いまだ頭が重いとかたる。盃は何にてかありつらん、だる盃ではなかりつるかと思ぬ。奇特やさやうの名をも始めて聞いた、五度入り、七度入り湯盃、可盃、芙蓉盃、金盃、銀盃、鸚鵡盃、藥玉船七寶のやれびいどろの盃、ちよくなどといふこそあれといへば、判官殿最期に、高館にて酒もりのありしとき出でたる盃にてある物を、え知らぬよなと笑ふ。そちほど物しりはあるまい。吾妻鏡のやうなる書にあるかや。いや高だちに龜井がのうたる盃を、武藏殿へおもひざしこれよと。

○烏帽子折をまふとて、山路殿が吹物の名をばなにといふやらん、名をば何といふやらんと繰返し舞へども、終に横笛出でず。人みな笑止に思ひ、むかうより扇を横へ指を押しつあげつ、笛ふくまねをし教へければ、ちくくうなづき、合點したる顔にて、揚句にちやるららと申さうと。

○舞はまひたし習ふ事はならず、なまじひにかな書を読むもの、ある席にて敦盛を舞ふに、東國の毛虫にはあはんといへる平家なしといふ。人みな不審し、源氏とこそ舞ふべけれ、けむしとは何の事をやと問はれ、彼返答に、鍵のさやの事にてあらうまよと。

○江州めかだの館にて、敦盛を舞ふ時、近江源氏の大將にといひしが、やれめかたは禁句よと思ひ、これのめかだはよのめかだと。

○和泉の國に松浦肥前守とて武士あり。彼前にて敦盛を舞ふに、命も知らぬといふ時、肥州を見付け、命も知らぬ松浦さま。

○釋迦は大工の子といふ、まことか。いや天竺淨飯大王の太子なり。さうではないと。さりとは。信田に、悉達太子は、高位なるばんじやうの位をふりすてたとあるは。

○伊勢海老をゆでてあかうなる時、いで朱鍵の柄をもゆでた物ぞと語る。海老は實なり、鍵の柄は朱塗にて塗りたるものなりと教ふる。そちのがかたをばよ、鍵の柄の二間三間あるを、ゆでたがめづらしからう事は、それより大なる京鎌倉をさへ、ゆでもしいりもしたは。うつけには薬がないと笑ひし時、堀河夜討に鎌倉をゆでて、廿日に都入とぞ聞えたる。

○幸若の舞を聞き、さてくおもしろのふしや、くどきや、中にもせめがおもしろきなどかんする時、惣じて此舞といふ物は、誰が作りし事ぞ。ござかしきかほの人いふ。無案内や、仁和寺にてつく



りたるなり。ついに聞かぬ。庭訓に、仁和寺のまひつくりと書きたるは。

○景清を舞ふに、法性寺の八ツの大鼓を、だうくとぞうつたりけると。聞く人八ツならばついでに數を八ツうたすし、など二つはうちし。はら九郎大夫答に、八文字にうちたれば、八つにてござ候は。

○ある舞まひの奥州に下向するありし。道にて會下の寺にとまる。非時過ぎて大織冠を舞ふ。よめ入り詰め半に、住寺の長老落涙の氣色あり。侍者ども思ふ、なにのあはれしき事もなきに、不思議なる愁傷かなと。舞過ぎて伴の旨をたづねければ、愚僧は舞に涙のこぼれたるにあらず、あれほど下手では、はるくと下りたりとも、聞く者あるまい。かつ忍死なうかと思ひ、ふびんさに泣いたよと。

○饅頭を菓子に出してあれば、これは小豆ばかり入りて位高し。我等ごとき者のたまはるは、ありがたきとていたく。又砂糖饅頭は近來の出來物、なにの系圖もなし。よのつねの者はうまさのまゝ、奔走に思ふといひてくすみたり。其方はなにとして、そのわかちをばしられたるぞ。かくれもない満仲の舞に、貞純の親王の御子をば六孫王と申し、六孫王の御子をばたゞのまんぢうと申し奉る。

○堺にて牡丹花のもとへ、くたりたる饅頭を送りければ、色くろくしかもかたぶく人くはず此まんぢうを馬になさばや

○或人のもとより饅頭を五つ送りたりしが、其席に人五人にあまりたれば、配當するに少し。一首をよみて饅頭を送れる人の方へ、

名を聞くも六孫王のまんぢうを五つはくらひたらずこそあれ

○和泉の國の堺北の庄に御坊というて、本願寺の末寺あり。彼寺建立成就し、平野といふ所より大頭のがれ、舞大夫をよび、堂の祝に舞はする。高館をはじめけるが、破れた堂といふまへにて、あつと思ひ、やぶれただうがめいのはの洞と。時にあたりての廢忘はなにの上にもあらん。

○人々池の邊にあそぶ。蛙を見付け、塊をうつ。年ふけたる人、さやうのわろき手すさびをばせざれ、今こそ生れさがり、田の中堀の端にすめ、いにしへはあれも大名であつたものを。こくうなる事をいふ。まぎれもなし、夜討曾我に、さこそ尊靈蛙殿とてあだにもいはぬは。

○殊勝なる長老の十番切を舞ふを聞きて、落涙止まらず。後さて十郎五郎の兄弟は氣のみじかい人や、やれまちところへられたらば、殺さずともかたきが死なうものをと。

○大夫舞臺に出でて八島を舞ふ。去る間判とばかりにて官をわすれたり。鼓打あゝ官やあ官とはやしつひに官をいひやます。大夫聞きかね揚句に拍子を踏んで、せめにかゝりあふ。其官ははう殿の跡に下らせたまひけり。

○玉石とて能登に舞まひあり。和田酒もり一番ならでは覺えず。去るほどに新左衛門といふ侍のもと



にて舞ふに、あれなるは和田殿とばかりいうて、是なるは新左衛門を殘したり。主人とがめて、など舞にある名をばおといたるぞと申さる。いや其新左衛門はとく死れて候と。

○磯部の庄司といふ人の方にて八島を舞ふに、庄司にはなれて三年になるを、行あたり屏風にはなれとと舞うたる。

○堀河夜討を舞ふ時、判官殿といふを聞きて、其のまゝ泣くものあり。なんのあはれさになくやと問はれ、其事候よ、高館かと思つて泣いたと。

○一番に満仲、二番にゆりわか大臣、三番にとがせがたちを舞ひけり。とくより行きて聞きたる者の歸れば、けふの舞はなに／＼にてありしぞと尋ぬれば、さればよ満仲といふ人、けんかいが島で勸進帳をよまれたるところを舞うたが、おもしろかつたと。三番の舞を始中終とがつてんしたるも言語同断。

○原殿といふ侍の前にて高館を舞ふ。そこで腹切れ龜井にゆきあたり、そこで、せごきれ龜井。

○人ありていふやう、判官殿と辨慶とは何の仔細ありて中がよかりしぞ、不審がはれなんだに、今日八島の舞を聞いて理がすんだ。なにとすんだぞ。辨慶は判官殿の若衆であつたもの。なせにと問へば、紛れもない事よ、判官武藏をめされと、かくさすにまづさいしよに書きたるは。

卷之八

頓作

○或大名の前にて、當時能の上手は誰にてあらんやと、各讚嘆ある中に、今春をほむる有り、金剛をほむる有り、人々心々なりし時、こごかしき者の申しけるやう、私は唯春日大夫を天下第一と存ずると。いかなればさはいふぞ。春日を上手とは我等計りの申すにては御座ない。昔から神達も褒させられた物、三社の託宣に春日大明神とあり。

○尾州熱田大明神の祭禮に、貴賤參詣の袖をつらぬる。かしこも伊勢兩宮の如く禰宜あつまり、袂にむすほ、れ、錢を貰ふ事かまびすしき程なり。さるまゝ百姓あまたつれだち下向するに、さても熱田の禰宜共は人でないぞといひつゝ、屹度後を見れば、白張装束に烏帽子きて金磨の扇末ひろがりもちたるあり。大に驚き、そのまゝたゞ神半分の人よと。

○武州江戸家康公天下をしらしめされし始め、伏見のある屋形にて霜月末つかた來正月をばひがしにてやなされん、又都にて御越年やあらんなど評定ありしに、或者のまうすやう、いや御年をば東にて遊ばされ候と。誰に聞きたるぞ。我等のよく存知て候、明年の曆に、大將軍東にあり、しかも此方に向つて大小便せざれと尊び書きてあり。



○太閤御所をば豊國大明神と祝ひ、吉田の神主に知行一萬石給うたるよし人の語りたれば、宮川殿、中

中の事や、太閤御所は神におなりあり。吉田の神主は人におなりあつたよの。  
○今の武藏の江戸、扶桑國の最頂たる御城の始めは、太田美濃守法體して太田の道灌といひき。名譽

の武將拵構けるを聞及ばせ給ひ、公方よりそちの城廓の景氣を寫して見せよと仰遣されければ、

わがいはは松原つゞき海ちかく富士の高嶺を軒端にて見る

○信長公濃州岐阜に御座の時、宮内卿三位侍從武藤、四人に碁をうたせおはしますに、沼の藤六罷出  
で、此席は四句の文にて候と申上る。一人は迷故三位殿、二には悟故侍從殿、三に本來武藤殿、四に  
何處宮内殿と指を折りて、時に御機嫌なめならずありけん、四句の文とは迷故三界に城、悟故十方

空、本來無二東西一何處有南北一此心を得たまは、生死岸頭大自在ならん。

○信長公堺の津へ御座なされし時、蠣とつめたと海鼠腸と三色を進上せし。其座敷に三條殿御入有て、

かきくれてふる白雪のつめたさをこのわたにてぞ寒さ忘する、

○丹波の國大の原にて、洞家の僧一休に向ひ、如何なるか是れ紫野の佛法。桔梗、刈萱、女郎花、紫

苑、龍膽、地榆。如何なるか是れ紫野の魔法、愛宕嵐に比叡の山風、奥は鞍馬の山嵐。

○釋の頓阿桑門の風情し、内裏見物の折節、ある殿にて座敷より、修行の僧は何處の人ぞ。東の者に

て候とあれば、乃ち

なにかあづまのはての思ひで

とあるに、頓阿

都にてまづ語るべき富士の雪

さらば座敷へと請せらるゝに、禮もなく座上になほられたりければ、又、

いやしきものはうへを恐れず

とあり。頓阿言下に、

水鳥の浮べば月のかげふみて

○天龍寺の開山夢窓國師は超過福僧にてまします。僧形如何にも肩うすくすぼみたり。人拜顔を遂げ  
言上するやう、世間に貧窮の輩をば、なべて肩のうすい者とも、亦無力すれば肩がすぼうだところ申  
し傳へて候へ。夢窓の御肩興さめてうすくすぼみたれど、福分におはしますは如何と。さればよ、予

が肩あまりにうすくすぼみて、びんばふがみの居所がなさよとの給へり。

○面とはなせに云ぞや。面にかくる程に聞えたり。内に置く時は何と云べき。其はめんぎうといはん。

○一休住吉に松齋庵といふ小庵を結ておはせし時、何者やらん、其名を書ずして、短冊を送る事あり。

あたら人深山のおくにすませばやこゝはうき世のさかひちかさに

返歌、



身をみともおもふほどこそうき世なれ深山も市もおなじかくれ家

○大陰囊をもちたる人あり。めづらしきさまに沙汰しければ、見度事におもふ者多かりき。或時客いたり連々承り候と所望し、是は常に人の申したるほどはなしといひければ、左右であらうず、聞いては千金よりも重く、見ては一毛よりも軽しと候。

○宗長紫野に居住の時、延暦寺なる知音の坊より、人を出し、誹諧の發句望み候。此夕夜咄にたり、我人案じてあそばんといひ送りければ、

猿の尻木がらし知らぬ紅葉哉

使とりて出しを又呼戻し、兒達もぬ給んや。なか／＼といふに、猿の面直されし。澤庵境にて冬の當座、

猿の尻ぬらすや時雨松ふぐり

○僧の三人來るを見付け、途中に皮を敷き、此大河をば何として渡られんや。一人は此河に橋あり、心安くわたらうと。一人は瀬をあさ／＼とわたらんと。一人は乾た川を渡るに、何の造作があらうと。

○珍客は若衆なりし。座上に置き參らせて、相伴など歴々たる座敷半に、初心の座頭來れる。末座の人彼に問ふ。そちは占方の上手と聞く、此座上にいかなる人のおはすぞや。されば兒か若衆なるべし。扱も奇特を占うたるが、ちとは目が見ゆる物かなと不審はれず。何の調子を伺ひいうたるぞ。されば六曜の占の外は存せぬなり、其内に草中螢が出てあり、知んぬ、螢は尻に光ある間さて申したるなめり。

○百合の花をいけたるを見給ひて、幽齋法印、

床までもゆりにあげたる花瓶かな

○一人は寒山一人は拾得と、各に名をいうて出る狂言あり。然るを二人連立ちたる、先の者、是は寒山拾得と申す者にて候と名乗しかば、次の者云ん事なかりしに、我らも其連にて候と。せめての事を云うた。

○法華の沙門と時宗の法師と知音にて、とり／＼參會ありしが、いかゞはしたりけん、法華の沙門此頃栗毛の馬をもとめたり。一段氣に入りて時宗くりげと名を付けたは。何の仔細に時宗は出たぞ。とかく此馬をとりたがる。乃ち時宗の法師、我も四五日以前に葦毛の馬を買うたは。名をば法華葦毛と

つけたよ。いかなれば法華とはいふ。とかく彼馬口がこはさに。

○豊後にてふないの城を廻國の僧見物するに、十月の末商人門の外に柑子をうるあり。彼僧一つとりてくはんとする。是はと尤むれば、かうし門を出でずとあり、これは門外なり。やれ曲事やといつて扇をもちうたんとする。こはそもいかに。僧は叩く月下の門といへり。

○伊勢の桑名に古諫とて醫者あり、天然とかほくせあし。濃州立政寺より文叔といふ僧下向し、毎座對談し、後本山に歸る時、人問ふ。桑名にて古諫をばなにと取り沙汰する。されば桑名はつらのやすい處やらん、古諫を百つらといふ。美濃でならばやす／＼と三百はせんものを。

○青苔を煎豆につけたる菓子、太閤の御前へ出したれば、幽齋法印向はせ給ひ、何と／＼とありし時、



君が代は千代に八千代にさられ石のいはとなりて苔のむすまめ  
○濃州鏡島にて、乙津寺梅の寺といふ。彼寺にて、

香がしまばこと木もにほへ梅の花

祇 公

此寺の一代に蘭叔和尚とてあり。酒もりの座にて、正雲といふ僧に、一つのめとあり。禁酒と答ふ。  
何事に。飲酒はこれ佛戒なりと。して飯をも断つか。飯をいましめの旨ありや。なかく、い、がい又  
はおたいがい禁戒よ。和尚は酒茶論の作者なり。

○甲州と越前と取合ひの時、越前の大守の前にて朝粥すわりぬ。末坐より一段の出来がいに候と申す。  
其座におはせし東堂、なかく國にはあるまいかいで候とありし。奇特なる作勢とこそ。

○幽齋法印或ところへ立よらせ給ふに、家老の人立出で挨拶仕り、其座の脇に机に手習ふ双紙あり。  
取りて御覽すれば、それは我せがれの清書にて候と申したり。さて、奇特なとほめ給ひつれば、御  
覽じ候かた、みなさやうに仰せ候といひすて、奥へ通りたる迹に、

なら坂や此手をほむるおやごころにも角にもうつけ人かな

○山寺に人いたりて、さてもくおもしろき境地や候、大略八景も候はんと申しければ、住持の返答  
に、當寺は十景の古處なりと。さ候へば秦の始皇の地にもまさりたり。八景の外にはいづれを用ひら  
れ候ぞ。されば檀那あり。麓に下り齋をはつて、こざけにも酔ひて歸れば活けいあり。さもなし。唯一

時糟糠汁の風情なれば、ことに貧けいあるかな。

○さる大名の仲間に異名を長棹と云者あり。いかなる心持により、此名をば付たるぞと、人々卑みける  
に、一人の作意には、唯物の直なと云事にて有うすと。又別人は唯物欲さうなんで有うと。後のが合たげな。

○九州に木山とて連歌の上手あり。八月十五夜に紹巴にて發句をせんと、月もなしといへり。紹巴の、  
わるい、名月に月もなしはと申されし。まづすゑを聞給へとて、

月はなし日をそのまゝの今宵かな

○翠竹院道三のもとへ、脇指を持來りて賣らんといふ時、此ねすんはいかほどぞとありしに、賣主三  
百八寸と返答せしも。

○京の町にて、しだれ柳の物見なるをもちありく。人此柳を見付け、ことわりもなくおしてとる。こ  
は何ぞ狼藉なり。知らずや柳はみどりといふ事を。實尤も道理ありと、乃ち棒をもつてかれが鼻をは  
りたり。大に血ながる。これはといかれれば、それこそ鼻はくれなるに。

○或人紺屋に來り、これの亭主を上手といふは實か、此さる物の形に笛の音をつけてくれよといひす  
て、歸りぬ。しばらく工夫し、上に日の丸下に鍵をつけ、後あつらへたるぬしに渡す。是はといふに、  
別に仔細なし。笛の音はひやりくとふくほどに。

何と見れども先のちかさよ



日をえらぶ唇はしはす二十日ごろ

元理

○座敷の興に物語をせんとする者あれば、かたはらより苦々といひて評したる時に、件の仁腹立し、此咄をそちどもにきけにてはなし、我は物語をふくしてあそぶよと。

○食を過す人に向ひ、餘飯を多くまゐるが笑止なよ。臨時に米の入る事なれば、第一損也。さりとして薬なればよし、大毒にて彼是悪しと。夫は誰人の指南ぞ。老釋迦の説なり、天上天下い、がどくそんと。

○秀句すきな者、境に逗留せしが、聚樂に上る大名衆なぶりて、何事を珍らしき事はなきか。こそ候ひつれ、此比境の大道にて物を賣るに、へうしにかゝりはやされあるきたる者候。うそであらう。いや先へせりかうとふしにうたへば、後からたんほ、うつて候。

○一目見るからむづかしさうなる者、紺屋に來り、この布を染められよ、我このみあり。肩には上々の佳酒を、腰にはかたのごとく中なる酒を、裾には下の下の、くらはれぬ酒をつけてよかるべしというて歸りぬ。其後日を経、染物出來たるや。なか／＼とてわたすを見れば、上々の酒には麻がらを、中の酒には烏を、下の下くらはれぬ酒には洲濱をつけたれば、かのをとこねだれんやうもなかりし。染屋に賃を高くやりたい。

夏の夜は酒のおりにもさもにたり呑悪うしてかこそわるけれ  
此夏はかなしとおもふ事もなしのみくふ事のふそくなければ

○尾州祐福寺に澤良といふ長老、所談の砌、こもそう一人來り庭にて聞く。澤良縁に上りてとあれば、心得候と縁に上り、兎角しくべきものなし。長老再普化僧と呼ぶ。やつと答ふ。其こもをしけ。

○山城の醍醐寂靜が谷といふにて、  
散る花の音きくほどの深山かな  
散る花は苔におとして風もなし

心敬  
宗祇

○境にて質屋に米を十石入れ置き、錢をもちて來ては、其代ほど米を取りて行き、度々の注文通に書付け借主に遣はす。或時錢をもたず來り、一石唯わたして給はれといふ。質屋心安くおもひ通につけずして一石わたしぬ。月迫になり錢を持來り、不殘米を受取らんとするに、質に置きたる米一石なし。借主盗人をいひかけ、結句元の置きたる米にてなくば請取るまいといふ。其時亭主先錢を見んとてただものえり、一文もとるべきなしといふ。何事にやと尋ねれば、我がかいた錢が一文もない、元の米でなくばとるまいとなり。我も元の錢でなくば取るまいと。此作意分明なる哉、是にてこそすみたれ。○御意に入りて常にまゐりつけたる人の、關白殿へ出んとする時、小姓衆今程聚樂の法度あり。知らずや、やくると死ぬると、此二字申事禁制なり。汝たくみ、殿に二字をいはずるやうにせよ。心得たりと乃ち出る。あんのごとく何事やあると御尋ねあり。其儀にて候、三條の辻に面白き物を棚に出して置き參らせた。何ぞや。楠にて仕たる風呂と釜とを見てござあると。うつけをいふやつかな。木釜



をたかばやけて役にたつべきか。それはあ御法度がやれた。

○大阪にて鳥屋町を逸興なる男、鳴といふ鳥かはうというて歩く。珍しき買てやと思ひよびよせ、雲雀をこれこそ鳴なりとて賣りぬ。山家に歸り見すれば、なかく鳴にはあらず、うつけたりと叱られ、又はるく大阪にもちゆきもどさんといふ時、鳥賣それは物を知らぬ人の申す事よ、鳴はいろいろならず二色ならず、百しぎとて百色あるぞと。實におもひ、又とりて行きたり。

○戯に僧盲目の鼻をつかまへ、如何なるか是佛法。乃ち曰く、世尊拈華の時はなをにぎる。

糸ざくら見れば花さく柳かな

宗 祇

○京のたちうりへ悪黨來り、巻物どもを見、終に可然きなしといへば、女房藏へ行くまに、巻物一つぬすみはさみ箱に入れたり。さて後に出たるよき内を銀一枚に乞ふ。やすしとて賣らず。その間に女房かぞへ見ればなし。隣家にいひあはせ、盗人一二町歸りし時、人をはしらかし、今のをまけんに歸り給へと。乃ち歸る。銀をうけとり、巻物はそれにあるにつくと、頻にあらそふ。はさみ箱を明けたれば有り。巻物をも取返し、銀をも戻したり。事無爲なる作意也。

○攝津國布引の瀧にて、宗祇

此頃はたゝみをりつる布引をけふ思ひたちみにきつるかな

○太閤御所風呂に御入りありつるを、蜂屋伯耆守御垢にまゐらんとてふかれけるやう、知行くれい知

行くれいくくと、拍子にかゝり興を盡されし。其儘蜂屋を捕へ、是非ふかんと仰ある。さまく辭退せらるゝを、無理にふかせ給ふやう、奉公せいくくと。作意のはやさ短舌にのべがたし。

○孔子道を行き給ふに、八ッばかりなる童あひぬ。孔子に向ひ申すやう、日の入る所と洛陽といづれか遠きと。孔子、日の入る所は遠し洛陽は近し。童、日の出入所は見ゆ、洛陽は見えず。されば日の入る所は近し、洛陽は遠しと思ふと申しければ、かしこき童なりと感じ給ひける。唯ものにはあらぬなりけりと人沙汰せし。

○京に智玄といふなま物じりなる者あり。又惠林といふ學者と東寺の門前にて行合ひ、智玄はいづくと問ふに、持たる扇をあけ、爰へ行くと答へたる時、それはあて字なりといへるに詞なし。扇をあけたるは一字をさり、鳥羽へといふ事なりし。早察してあて字なりと、打たるひだち奇妙々々。

○紫野明月橋にて或俗和尚にむかひ、明月橋月なき時如何。和尚幸に大燈之灯有り。

○雄長老霜月の半、四條の橋を渡らるゝ。河上に法師一人水につかりて居たり。あはれさに立寄り、國はいづくぞ。下野のものといふ。

醒睡笑 卷之八

七百六十七

修行とて水に腰よりしもつけのなす野のはらはいかにくだらん

○法華宗の寺に千部の經ありける半、いかにもそこつなる男参りて聲をあげ、ふと念佛を申しける。我と驚き、手をはたとうち、ま今のやうに、誓願寺にいつもいふ事よとなほしたり。



○名護屋陣として太閤御所具足をめし、舟より海をのぞかせ給ひ、我影のうつりたるを御覽じて、海の中にも武者ぞありけると仰せければ、乃ち紹巴、

釣針にかゝりてあがる甲貝

○新田秀忠將軍江戸の御城にて、大名衆御振舞なされるに、御鷹の雁の汁を仰付られし。再進しげかりつるを御覽せられたはぶれに、

振まひの汁や度々かへる雁

同元和九年の春、

山々の雪のあたまや春の雨

といふ前句に、

握りこぶしを出すさわらび

又、

高き物をぞやすくうりかふ

と云ふ句に、

ふじの山扇にかきて二三文

又、

今朝あけて雪をとりだす箱根かな

同いづれの年の始にやらん。

武藏あぶみふんばつてたつ霞かな

○雪の日そとより人來り家に入る。見れば殊の外暗し。あらくらや〜といふ間に、鉈が足にあたれり。内々ほしかりつるにと思ひ、とりて懐に入れぬ。座敷に直りゐたれば、ひたもの赤くなるまゝ、さても恥かしや、人の見つらんとかなしければ、とり出すべきやうなくて、案じわづらふ所へ、又人來りぬ。さきのごとく、あらくら〜といふ時、乃ち取出し、是れ〜なたをさへ懐に入れば、あかるうなるに、すんだとて取出し渡せり。

○宗祇修行の時、山中にておもひよりなき人三人行むかひ、一人いふ。

一つあるもの三つに見えけり

乃ち祇公、

類ひなき小袖のえりの綻びて

又次の者いふ。

二つあるもの四つに見えけり



又宗祇、

月と日と入江の水に影さして

又一人がいふ。

五つ、あるもの一つ見えけり

又祇公、

月にさす其指ばかり顯はして

右三句ともに聞いて後、三人いづちとも見えす失せにけり。

○誕生一檢校ある座敷にて物語のついで、癩には兎角身をつかふよしと聞き、めのよき茶臼を癩の薬にひかばやと望めるを、七尾檢校受記一ゐあはせて、

檢校の目のよき茶臼もとむるは手ひきにせんとおもふなりけり

○大陰核もちたる侍の、馬にて渡りたれば、雄長老、

のりくらの前にあまれる大○○○金ぶくりんとこれやいふらん

○虎狼野干といふ四字をかけて置きたり。亭主一向不文字なるを知りたる人、是は何といふ事ぞ。其を知らぬほどのうつけがあらうか。とてもそちが知るまい。もしよみたらば、我ふるまふべし。其方えよますばわれをふるまへと、かけづくにしたり。亭尤とうけごひぬ。さらば虎はなにと。とらよ。

狼は。おほかみよ。野は。きつねよ。干は。返答なし。亭まけてふるまひける。野干はと一言にとふ

たらば、問ふもの、まけになるべきを、二字にわけたる智恵作意あるかな。

○山中檢校死去のみぎり、とし四十八といふを聞いて、雄長老

南無阿彌陀四十八までながらへて今ぞおもむくしでの山中

○西行法師修行の時、津國七瀬の河にて、麥粉をくふとて、頻に噎れけるを、馬上より侍の見付け、

この河は七瀬の河と聞くものをお僧を見ればむせわたるかな

時に西行の返歌、

この河は七瀬の河と聞くものをめしたる馬はやせわたるかな

○三十三所の札をうつ順禮、江州醒井の水のもとにのぞみ、麥粉を食せんと取出し置き、立まはる間に、暴風吹おろし、迹なく散らしければ、

頼みつる麥粉は風にさそはれてけふさめがぬの水をこそめ

○山岡道阿彌、坂本より京に上る。乗物八人にて侍あまた連れ、いかめしく見えつるが、大津にてむかうより、座頭一人來るにひしと行きあたり、棒のさき座頭の顔にあたり、打破り血流る。心得たりといふまゝ、乗物にしかと取付き、此内にあるはいかなるやつぞ、是非出でよ。はたさんとの、しるに、返事もなくやゝありて、乗物の内より、座頭々々頬はいたむかと問ふに、腹立いやまし、散々悪



口におよぶ。其時我は飛田檢校なり、仲間過ちしたり。是非なしといふに、座頭乃ち聲をひきくし少もくるしからず、存せずして狼藉申したると詫びけるに、そちの學問所はいづれぞ、それを頼みてわびんとあれば、ひらに御免あれと、却りて手をすりけるとなん。

○近衛院御宇、頼政への難題、ひだりまきの藤淵、きりびをけ、頼政、

瀬はひたりまきの淵々おちたぎりひをけさいかによりまさるらん

○旅人在所の者に、此川をば何とかいふ。あひそめ川と答ふ。さらばこれを染めてたべと手ぬぐひを指出す。乃ち請取りて水に入れ、ひろげわたす。何とも色はないの。いや水色にそまりて候はと。

○東の野州常縁の前に宗祇ゐたまひしを、いくつにならるゝぞやと尋ねたまへば、とりあへず入道は六十三にまかりなると申されし時に、野州、

紫竹の竹のよはひながさよ

○越前と加賀の一向宗と取合ひの時、朝倉どの或會下僧にむかひて、敵も八幡大菩薩、味方も八幡大菩薩と念ずる。其一念は一般利生は如何にとあれば、僧いふ、味方は現世安穩、敵は後生善處と守らんとぞ答へける。

○禪僧先に立ちて河を渡る。山伏又跡より渡るとて、如何にお僧いかい鐘子のというたれば、僧のいへる、河中でなくば一服申さうものを。

○木村の宗宣とて吉野の代官なりし。京都に家あり。茶の湯にて三藐院殿を請じ奉り、次へお出でありし時、少女かよひに出でたり。そちが名は何といふぞと問はせたまへば、雪と申上る。跡より一人又まわり出る。其の名をお尋ねあれば、玉と申しけるにぞ、乃ち當座をあそばされし。

○三藐院殿へ春可祇候して侍りし。御庭前の櫻漸くひらくあり。一句仕れと仰せあれば、かすむめにとほすやはりの糸櫻

と、申したれば、さらば我も、

さかぬまをまつやしんくの糸ざくら

○廣橋大納言殿へ春可まわりてありしが、壁の根に、菊一もと咲いてあり。見事やなどほめまゐらす時、あれは壁の外菊畠なるゆゑ、傳ひて咲きたるなり。今一句と仰せあれば、

壁に耳かくす事をや菊の花

と申にぞ廣橋殿、

たそがれどきの秋のぬす人

○卯月十日春可宇治に侍りしが、けふより茶をつみそむるといふを聞いて、手始はいろはをえらむ宇治茶かな



○大晦日の夜半ばかりに雨のふりし。曉よりをやみて晴天になりしかば、春可、  
去年は雨日本ばれやけふの春

○越後の太守爲景公、國の中林泉寺へ年頭の一禮とて二月赴かせ給ふ。住持迎ひに出られける。折節  
庭前の白梅長老の衣上へ散りかゝりたり。時に爲景の一間、落花の端的。和尚、作麼生答時節梅花不  
借春風。爲景公云ふ、時節に不借春風、和尚一刀とて刃をぬきかまへたまうたれば、和尚云ふ、  
春風無手落花汝無手殺我。

○爲景公狩するついで、深山の巖穴に座禪の僧あり。彼に向ひ、彼は弓箭を帯して來るさへ、物凄じ  
き處なり。なにとしてかゝる峭壁には住するや。僧云ふ、我心があらうにこそ淋しからめ、心なけれ  
ば淋しとも思はぬと。時に爲景公答ふる者はたそ。僧云、巖松無心風來吟問へばこそ答へたれ。

○細川幽齋法印見付けのこうといふ處にて、宿主に向ひ、是より富士は見えぬやと尋ね給ふ。されば  
時によりて見え候、あれへ出て御覽候へと申す。乃ち小高き處へ上り見給へども遂に見えざりければ、  
方角もいざ白雲に目ぞくはるふじを見つけのこうのいらねば

○此跡は大名にて威勢ありつる人なれど、忽ち落人となり、宿かりそめの寒夜に、身はすくみかねの  
ごとく冷えわたれば、古壘をきていねられしが、狂歌、  
淺ましや世は倒まになりにけり人にしかるゝものにしかれて

○幽齋法印の御内なる松井といふに、振舞を御沙汰ある時、たびく人をつかはし給へと遅し。料理  
の者、鹽鯛のやけ過ぎて、如何とかなしめば、いや昔よりありし事よとて、  
こぬ人をまつ井の浦の夕食に焼きしほだひのみをこがしつ、

○まりこの里といふにて、中間馬のくつを買はんとす。代を高くいひければ、主人馬上より、  
くつのねは鞠子の里や高からんあすかひたまへ先にありく

○山崎宗鑑汁のまはしにあたりたる時、江州の兵主殿へ送る。  
武士のいるやかぶらの兵すなをよつびきしめて十二束たべ

兵主殿より返歌、  
武士のいるやかぶらの兵すなをこひやうなりとて八束ぞやる

弘法大師名のみ残り  
くうかいのお汁のわけはかぶらにて

○大風に壁のおほひを吹きおとされし時、めをかけらるゝ徳人のもとへ、俵を乞ひにつかはすとて、  
御無心は蜈蚣の手ほどまうせども又このたびも俵十たべ

○或出家舊友のもとに泊り、頭巾を忘れて歸りたれば、其ぬしの方へ文をそへてもたせ送りつる。  
行平のゆかりにたぐふお僧さま御立烏帽子残したまひつ



返歌

立別れいなばやなんと思ひしに形見の頭巾今かへりきぬ

平家

○小松の内大臣重盛公は釋迦の弟にてありし事よ。ちとも知らなんだと語る。うそさうな、時代も二千餘歳違ひたるものを。しても醫士問答といふ平家に、重盛の定業もし醫療にかゝはるべう候は、あに釋尊入滅あらんやといはれた。

人をとゞめん言の葉はなし

佛だに逃れぬ道は別れきて

宗 祇

○一向不文なる者平家を聞かんと行き、なにとしてあの風情の耳に入る事あらんやと、まことしからざりしが、彼聞きて歸りぬるま、何と平家を聞かれたか。されば木平家は一段おもしろかりつるに、時々座頭のをめぐてくたびれたと。

○土肥の次郎實平は、大手の木戸口に主従五騎にて控たると教へければ、弟子思ふ、控物こそあらめ、五きはいなものなり、せめて腕はまさりなんと、晴がましき處にて、主従腕にて控たると語れり。

○橋のゆきげたをさら〜と走りわたるを、やゝもすればわする。そちは鈍なり。膳にすわる皿にておぼえよといはれ、或時又橋のゆきげたを、ちやつ〜とはしりわたると語りごとは。

○いけづきを佐々木にたぶ。佐々木畏つて申しけるはといふを、佐々木をいけづきに賜ぶ。いけづき畏て申しけるはというて、いはん事なし。

かすり

○正月二日の朝西よりは針賣の來り、東よりは烏帽子賣の行き、途中にてはたと行合ひ、烏帽子商人より、はりの始の御よろこびと申したれば、針賣とりあへず、何事もゑぼしめすまゝにと。

○正壽庵といふ坊主のもとへ、はや齋出來て候。とくわたらせ給へと中間を使ひにつかはす。彼使ゆきて、門よりしやうじわん〜と呼びければ、坊主をかきしき事におもひ、いやづ〜とぞ答へける。

○武家の愁傷ありときいて、巾につかはす口上に、御親父逝去の事は非なし。併生老病死のならひ、いたつて歎きあるまじく候といへ。右の使者、生死病死を打わすれ、だんするべうしと申しければ、されば親にて候者、ひりや〜にふりよにはて候と。當意即妙なるうけあひや。

○山芋をば薯蕷といひ、ところを野老といふ。旅人山路を歩き、樵のやうなる老者、鍬にてつるのあるものを掘るあり。旅人たはぶれに、ところほるやらうといひかければ、いや山のいもじよ、と。いもほりのことば心ぶかや。

○黄菊紫蘭咲亂れたる前栽あると聞いて、すきの人々集りければ、宿の主取難し暖め酒を二色、燗鍋につぎ、右と左にもち出で、なにと各はふる酒をこしゆめすか、又濁酒を進じゆ參らせうかと。



○江州志賀の浦に姥あり。天然作意、うまれつきてかすり秀句をいふに上手なり。かすりを好む盲者あり。若狭の小濱より、はるくくと彼がもとへあひに行き、なにとなく宿をかりしが、飯の汁を一口すひ、此汁の實はなにぞと問ふ。姥それはく、たちの汁候よ。人の口きらふとて。いや去年八月からなまいておいたと。

○鎮西より天台山にのぼる學侶ありしが、或時病氣をわづらふ。西塔の法師來り弔ふついで、此病をば生得筑紫風といふ。それは何とてと尤むる。しもからひえのぼるほどにと。客僧いや鎮西には天台山とこそ申候へ。この故は、唯ひえのやまひぢやと。

○京に積善院といふあり。又建仁寺に兩足院といふあり。或時積善院兩足院へ入來の事あり。眞俗の物語、時過ぎて後、人の果報無果報はせんかたなし、かりそめの寺の名さへ、我がすむかたをば、くちすさびにもしやくせんゐんところよべ、又其方をばとりはづしても、りやうそくゐんとよぶけなりや。

○遠州の内かたはらに古寺あり。鷹野に出でける武士の候て、思ひよらす立よられたれば、住持とおぼしき僧、手づから堂のまへをすぎず。なにのためぞやと問ひけるに、菜園なり、其節をうかうひ種をおろさんとすと。乃ち侍のいへるは、道場の庭に、なをまくさまんだの時いかんとあれば、老僧鎌のかしらをおさへて、せんだばかりもできさせたまへと。

○そなたは源氏の晩鐘をきかれた事はなにか。いや貴所は、平家の落雁を見られたか。

○護摩堂の本尊不動の前にそなへの餅あり。人見てあの不動の餅をニツ三ツこんがらとやいてくうたらよからうな。新發意出てくひたくばくはしませ、たれぞ無用とせいたかや。

○會下の寺あり。座頭兩人客殿にて平家を語る聲方丈に聞ゆる。東堂手を拍ち喝食をよび、面に琵琶を調ぶる音せり。平家かべいけか聞いてこよと。喝食走戻りて、へいけなり。つれべいけでさうと。

○會下僧に齋をすゆる菜に蕨あり。終に服せず。施主如何なれば蕨をば食せられぬぞと。人の口やかうとて大事候まい、けしあへにしてさうほどに。

花を折るか人を見るらん

躑躅咲く木の下らび手をあげて

○京の町にてちひさきあしだを賣る商人、こあしんだくというて先に行けば、其後から菜を賣者のついで、なかうくと。われがれに似たひきがすまぬ。

○座頭の琵琶おうて來るを見付け、おどけ者が、なつとの坊はいづくよりいづくへおとほりぞ。わらの中にねてから、糸ひきに行くと。

見た所うまさうなりや此茶のこ名は唐糸というてくれなる

○宗長の連歌の座敷に、初心と見えし座頭一人ありつるが、籠忽に一句申さんやと伺ひければ、宗長連歌過ぎての事にせられよとありし。



○利陽にて鶯菜をもち、一人の女房うぐひす菜めせ〜というてうれば、買はんとする人、そちはかたことをいふ。あをなめせとはなせいはぬぞ。鶯にあをとよむ聲ありやと。彼うりてかちにし事よ。

鶯も笠きて出よ花の雨

利休 雄長老

賣りにくる程をしとへば我園のうぐひすなとて音こそ高けれ  
○一寺の崇敬世に越えいつくしき喝食ありつるが、思ひもよらぬやまふにさそはれ夕の煙となれり。かの骨を東堂我前に置き、衆中の僧にむかひ、寒夜に焼き残す一束の柴といふ句をいだせり。終に大衆の語出です。時に東堂この葉ばかり残つたよ。

○喝食あり。東堂に膳をすうる時、和尚あつばれ月一輪かな。喝食ほしくもないのとて膳をとりぬ。

○よき若衆をともしひきたる僧を見て、あつばれ黒雲かな。あれがせうすよな。

○水上の兎月に驚く事はいかん。おづるも理あり。弓張月のある時は。十五満月の時いかん。十分に引詰めて見よ。射手如何に、桂男。矢づかは。十三やもあり、十五夜もあり。

ひかぬにつよき弓のいきほひ

宗 養

○あつばれまるい水かな、すみきつたの。

○車に片輪あるを見て、一人の僧は戒行がよいな、かたわがないほどに。一人の僧は、戒行がわるい

な、かたわな程に。

○大善知識を見て、あつばれ小便所かな、如何ほどの人がしとしつらふ。

○石上の松は座禪の僧に似たよ、ねいりもせずごかぬ程に。

○漁人妬二梅花、  
花見に舟をかられうすよな。

○あづまごとの歌いみじう好みよみけるが、螢を見て、

あなてるや虫のしや尻に火のつきて小人だまとも見え渡かな

吾妻人のやうによまんとて、まことは貫之がよみたとぞ。

○津の國に多田といふ在所の候。同近里に役所ありしに、人足ふたりとほる。關守のとがむれば、先に行くもの、是れはたゞの夫にて候と。關守さあらば八島軍をかたれ。それはつぎのぶにお尋ねあれと。天然かたくみか。

○有馬の湯に三ヶ月のさし入りたれば、月の湯治は何の病ぞ。道理よ片輪な程に。十五満月の時は如何。

○片輪と片輪が寄合うたらば、重病ではないか。一僧出でて、いや月に一度の闇を愈さんとて候よ。

○静にあゆみて額をうつてすよ。はしらでうつてすの。

○或僧冬扇を持ちければ、雪中の扇になんの役かあらん。僧しばらくありて、扇をつかひ、當話につまり、汗がひてさうよ。



○見ぬ戀をする時、あつばれ敵の城かな、せめて見たい。

秀句

○もと同學たりし人のもとへ、廣韻をちと貸したまへといひやりたれば、此方にもいるとて貸さず。後に逢うたるに、以前はいなものを貸されなんだと恨みければ、光陰をしむべしとありけり。借主遺恨を含み、重ねて先のをしみての方へ、明朝齋を申さんといひやりぬ。必ずゆかんよし返事なりき。亭曉より起きて朝食をいそぎ用意し、内の者にも早々くらはせ、棚もと其外掃除をきれいにしておきたり。件の僧來り、まてども更にいひをくる、おとせず。何とて膳は遅きぞ。とき人をまたすとあれば、早や疾く過ぎたは。

○若衆ぐるひをするというて、妻いろに出で腹立す。男たる者は若衆ぐるひをせよと、式目にのせられた神社をしりしとかけり。女房即座に其式條のむねを本とせば、そちのがいよくとゝかぬなり。さいしをもつばらにすべしとあるに。

○京にて傍輩の中間行合ひ、そちは今誰のもとに奉公をするぞ。三條のお奈良屋にあるは。おの字をつけていふをにくみ、おならやはのくさい事をいふ。それならばそちはなにとて我るところをば問うたぞよ。

○宗祇と宗長つれだち三井寺を見物の時、宗長のいへるやうは、ちとぶさうぢなのとあれば、祇公を

れはよい前句さうなとさふらひしに、乃ちとりなほして宗長、

掃除もたらぬ三井の古寺

祇公又、

坂くだりくしやばう／＼とはえしげり

○信長公東寺のあたりを過ぎさせ給ふ事あり。馬上にてひたもの御眠りありつるを、沼藤六驚かし申せば、爰はどごぞ。右は六條さきはたうふくじと申したりつるに、あのしらかべかやと。

○百姓の福力なるあり。惣領の子才智あれば、笛を稽古させけり。明暮謠の、小鼓の、大鼓のとして、出入のたゆることなし。祖父は隠居の身ながら、こはそも何事ぞ、稼穡の艱難を忘れ、紡績の辛苦を無になし、我家の諺をばよそに見て、身體のはてんするをとかなしび居けり。かくて三年過る冬十月藝者あまた集め、おびたしきはやしを興行する座敷へ、頻に祖父を呼出せば辭退もかなはず出でぬ。孫一番ふいてどつとほめ、人みな聲をそろへ、さて祖父の歡喜さこそなどとりはやしたるに、祖父されば人の耳には笛の音のなにと入り候や、我が耳には田うらう／＼とより外、別の音はいらぬと。

○顰眉目よし、ま一度こい、顔見うと世話にいふを、秀句すきな人の門にていかき見めよし、めせといふ。なか／＼買はうと呼び入れ、あひしらひ出でて歸るとき、いかき賣を招き、ま一度こい、かご見うと。



○和泉の境にてこれへ参る道に鈍なる男あり。何やら手に持ちて居たるを、横道なるものとはりさまにおつとり逃げ行く。やれ盗人よと呼はれば、結句とりはせぬかうたとあらがふ。誰も極むる者なうて、とりての物にぞなりける。彼を見るに、忽ち我物を奪はれても、所に正路なる地頭なくば、淺間しやとられ損にこそならんずれと語るに、とられてもとりてもかくればあるまいかと問ふ時、されば右申せしはうそなり、實は今朝鳶が魚をくはへ來り、宿院の内にてくらはんとする所に、松の上より鳥飛び下り、これを奪ひとり、木の上にてくらふ。鳶はひいるぬす人とさけば、鳥はかうたかうたというて、おのが徳にぞなしたる。をかしげにてこゝろふかし、鳥は鳥中の曹參とあり。

○夏の天に數日雨なうて、民家干損を歎き、氏神の社頭に、風流をかけ雨を乞ふに、一滴もふらず。いつもふるが奇特やなど沙汰しあへり。かたくなゝる宿老うちうなづき、今度のをどりがうらは一向氣にあはなんだ、なにが大鼓をばてれつけくつてつてれつけとうち、鐘をばてんきくやとたいて、笛をひよりやひよりとふいた物、何として降らうよ。

○須彌の四州の内、天よりふり物おのゝかはれり。北州は瑠璃の雨、東州西州は瞻蔔花雨、南州は清涼雨、勅によりて和泉式部雨請、

日のもとの名にあふとてや照すらんふらざらば又あめが下かは  
此歌にて空かき曇り、大雨ふりし。

○京にてさかしき座頭、月忌の座敷へおそく來り、内をばとく出でて候が、道にて鐘のおと仕候まゝ、立よりて候へば、酒もり談議にあうて、さてぞ遅参いたし候といへり。酒もり談議とは何事ぞや。さればもはやたゝんとはねつくるひせしに、爰をば法然の尺にて一つ申さんとあり。又たゝんとすれば、善導の尺にてま一つ申さんと。

○長岡越中守殿豊前の國ひるがの神へ参詣あれば、神主悦喜不斜、賞し申せし座敷にて、太守の羽おりを見、さてもめづらかなる唐物やとほめまゐらせければ、乃ちぬぎてつかはし給ふ。其當座の興に、

はれ物にあらぬ我身のとうぶくをひるがの禰宜にすはれこそすれ

○或年の春幽齋法師坂本の壽齋といふ碁打をつれて、吉野参詣ありしが、かつての明神の前にて、そちが代にとて、

参錢をはまのやうにはまかずとも碁にはかつての神やたのまん

○義政將軍の御前に、同朋萬阿彌罷居たる時、作意を御覽せんとやおぼしめされけん、尺八を投出しそれゝ車が行くと仰せければ、萬阿彌いそぎ立ち、ちやくとおさへぎまに、失うてはなるまいと、取りて懐に入れしと。

○世の中はいづくにいかなるものが、親類にあらんも知らぬなど、かたるついで、げにも鴟と鳥が親



子にてある事を、此程知りたるはといふ。これはもつての外なる僻事であらうと。いやしかと實なり。よそまでもない、われが直に聞いた。此十日ばかりさき、庭へ鳥下りてあそびるければ、鴉もきたり、又堂鳩も飛來る。三鳥よりあひたるに、鴉鳥に向ひ、父々といふ。鳥うれしげに子か〜と呼ぶ。堂鳩證據にたち、う〜とこたへたれば、まぎれもなき親子ではないか。

世の中の親に孝ある人はたゞなにつけてもたのもしきかな

○廣橋大納言殿兼勝公へ、相國寺の保長老より使僧をもつて、明日の和漢に罷出度候へども、瘡氣のゆる御免の旨御披露願ひ奉るとありし時、彼僧を呼び給ひて、口上を御聞きあり。それは仄のおこりか平のおこりかと。

○宗牧へ或方より小角豆と茄子とを送りたれば、

さゝき殿なすびの與一給はりてお使からと賞翫ぞする

○周桂入江殿に知音の人ありて、朝歸の時、宗牧行き合ひてよめる。

かつぎ出る青苔色の頭巾こそ入江のあまのしわざなるらめ

○猪齋へ田舎よりおとづれとて、よくいにと茴香とをのぼする事ありし。言傳てられし人と文とは京につきしかど、送れる二種は大阪に忘れ置きたりとして渡さうりければ、

はる〜とよく田舎より給はれど茴香とてや上らざるらん

○旅人敦賀にて一夜の宿を貸したまへといふ。亭のこたへに、春か秋冬ならば易き事なり。夏月にとまり事はなるまい。如何なればと問ふ。爰は處をつるがとて、鶴程の蚊ありてくらふものを。旅人いふ、それならば宿かし給へ、毛頭くるしからず、生得我すむかた山家なれば、山ほどの蚊にくはれつけた身ぢやと。

茶の湯

○西行法師、伊勢の宇治にすみける時の歌、

爰も亦都のたつみしかぞすむ山こそかはれ名はうぢの里

○茶は是れ釣睡鉤とあり。又食を消するともいへり。

我門に目ざまし草のあるなべに戀しき人は夢にだに見ず

などいうて人々ほめはやしむ。末座に百姓の候て、それならば我々は一期茶を斷ち申さん、終日ほねをりても夕べとくとねぶればぞ、辛勞をも忘れ、又たま〜とぼしくてくふ食の、さえては何の益あらん、あらいやの茶やと頭をふりたれ。されば憂喜依人といふ題にて、

ますらをが小田かへすとて待雨を大宮人や花にいとほん

とよめる。さまこそかはれ、心はへひとしかるべくや侍らん。世をおもしろくすむ人は茶を愛し、賤の男は茶をいなと狂言せし、一旦は理あり。



何となく人にことばをかけ茶碗おしのごひつゝ茶をものませよ  
花をのみまつらん人に山里の雪間の草の春を見せばや  
利休はわびの本意とて、此歌をつねに吟じ、心がくる友にむかひては、かまへて忘失せざれとなん。

契りあれやしらぬ深山のふしくぬ木友となりぬる聞のうづみ火  
是は夢庵の歌にてあり。古田織部冬の夜のつれづれに吟せられし。

○泉州かうの瀧炭を定家卿の歌とや、

泉なる横山炭のしろくしてとる手につかず飛ぶ事もなし

又古歌に、

いかにしていかに焼けばかいづみなる横山炭のしろくあるらん

わかばうめぬるくば炭を置かへよくみたらんほど水をさすべし

夢庵

○祇公信濃路にて山家の草庵に立ちより、茶を所望ありつるに、湯のぬるかりければ、

お茶のぬるきは春のしるしか

即ち亭坊、

むめ過ぎてわがとがのをの花ざかり

○和泉の國篠田の茶屋に、宗祇一夜とまりたまひし事あり。茶屋の亭、今夜は冷えて、夜尿つかまつ

りてと申したれば、

我物とほしさのまゝにたてのみて夜尿しの田の森の茶坊主

○古田織部助に數寄あり。濃茶たちて出でけるに、客のいふ、此茶士は誰やらんと問ふ。上林春松

が雲切りなるよし返答あれば、彼客今朝の御茶別して忝きかな、春宵一ぶく直千金とあり。

○或寺の住持檀那へ見まはれる、土産の茶あり。主人ありがたく思ひ、内に請じ先づ茶を進せよと

たて、出る。亭主一口のみ、是は散々の苦茗やと叱る時、女房それはお寺よりおもたせのお茶と斷る

にぞ、亭主いはん事なく、今一口二口のみ、なか／＼や、くださるゝほどよいと。

○足利の門前に姥あり、往來の出家に茶を施す。されば學侶の智慧を察せんとたくみ、僧來つて茶を

所望すれば、人のひいた茶はをりないといへり。時に僧風がひいたりともものまんといふ。姥犬による

こんであたへたり。

○時しも夏のあつき頃、民家にむばらあつまり茶事してゐけるが、れんじやくかけたる商人の通るを

あはれみ、立よりやすみ、茶をも飲まれよと呼びたれば、あら嬉しや三服たべうといふ／＼立ちより

し。いかほどなりと飲まします。商人いや三服はそらね、定は一服たべうすと。

○法師あまた小人をともし、清水へまうでしが、まづ茶によりやすらふ。其中に一人の若衆甘

茶をのぞみ多く飲む。指南の法師おもふ、あまき物はむしにたゝると、又さきにては苦しからず、今



は先づこらへられよと教訓しければ、爰な人はげうさんさうに、一斤のうでも錢二十こそすれと。  
 ○如何にもまつたき福人あり。茶の湯といふにはなに入るものぞやと、數寄には第一の嗜み、茶壺候よ。さあらば一つもとめたい。伊勢より尋出し、これは藤四郎とてよき壺といふを、代八貫に買取り、福人祕藏し、名を平家法花經、伊勢物語とつけたり。人其故事を問へば、平家とは家がひらさに、法華經とは八貫に買ふ。つばの出處は伊勢物なり。態とさしたる家にてなければ、もちありく度かたりくとなるほどに。

○古今萬葉集といふ壺をもちてくすむ人あり。聞く者めづらしが、其心を聞かんとぞめどもあへて語らず。いはぬに深き心の程ゆかし。いたく執心し尋ねけるに、彼壺ぬしいふ、古は古茶、今は新茶、萬葉は無上別義を、集はいづれもあつめつむる故に、其徳をもつて名とす。

○山家に居住の貧僧あり。たま／＼客を得たり。物相一飯をもてなし、茶をたて、出し、これは、といわら壺につめたり、色香味を吟じたまへ。客おもひきや、かゝる住居に名壺のあらんとは。一座事をはり、彼の壺を見んと乞ふ。僧眠藏より持出でて、これは山賤の粉骨をつくし作るところ、始の稻をわせといふ。其疾藥を幾重にもあみかけ、焙爐の紙につゝみ詰めおき候まゝ、といわらつばと號するなり。

○歴々の衆三人ともなひ朝會に行き、昨夜鶏明まで酒にふけり、いまだ人心地もなかりし。會漸く過ぎ、亭主茶をたつる時見れば、三人ながら眠入りたり。されども上座の人目を明き、次の膝をつめられ、これも目をさまし、又下座の膝をつくに、彼心には茶の禮かと思ひ、まづおみしやれと魚忽にい

うて、よく／＼見れば、亭主いまだ茶を立て居けり。面目なき御推量あれ。  
 ○東堂のもとへ人來つて問ふ。茶堂と申す者候、又茶堂と申者候、いづれが本にて候や。いづれも苦しからず、されども、茶堂は唐韻にてごびたりとあれば、男合點ゆきたる體にて立去りぬ。一兩月過ぎ、今度は總領の子十六七なるをつれ來り、此松千代に何とぞ男名をつけてたび候へと申せば、乃ち左近の太郎とつけらるゝ。親あたまをふり感じて後、左は唐音でござあるの、いや／＼我等ごときもの、せがれに唐音は過ぎて候。唯ちやこの太郎とおつけなされよと。

○大相國御數寄ありし時、こい茶をひきうばひ、御祕藏の井戸茶碗われけり。御氣色かはる事なく、幽齋の歌の出來不出來によるべしと御誑あれば、  
 つゝゝるづつ五つにわれし井戸茶碗とがをば我身おひにけらしな  
 と詠じ給へば、此茶碗がわれずばなんであらうぞと、御感情深かゝりき。

○雄長老ある寺に立ちより、これに數寄屋はないか。いやなしとの返事なり。さらばわる茶にてもたてて出だされよと所望ありて後、  
 數寄屋あらぬお茶や昔のお茶ならぬ我身獨りはうすのみにして



○後陽成院の御時御口切とて、御壺出でたりつるを、雄長老、

御前ではちやくと歌よむつばなれば口をはられて物もえいはず

○慈照院殿、愛に思召さる、壺あり。名を何とがなつけん御工夫ある。頃、寛正二年八月二十日、誰かある今日は二十日かとお尋ねあれば、女房達の聞きもあへず、なか／＼今日初雁を聞きまゐらせたと申上られたり。あらおもしろの返事やとて、能阿彌にむかはせ給ひ、

たれもきげ名づくる壺のくちびらきけふ初雁の聲によそへて

と仰せあれば、能阿彌とりもあへず、

初雁のきこえあげける言の葉よいやめづらしき雲のうへまで

此由來により初雁といふ壺ありとなん

祝濟多

○抑四十六代孝謙天皇の御宇、天平勝寶元年己丑の春、始めて奥州より黄金を獻ず。重寶参りたりとて大伴家持に歌召されければ、

皇の御代さかえんとあづまなるみちのく山にこがね花さく

と祝ひすまして、是より元和九年まで八百六十五歳なり。和朝の山々、黄金涌く事彌増されり。

○正月に三ヶ日のくひ物をも、むかしよりいはひて書きたり。何にあるぞと問ふ。曆に候。なにとあ

る。元日はかん日、二日はもち日、三日はくへ日。

○左大臣信長公或年の元日、曉さうにのお膳すわりけるを御覽すれば、箸かた／＼あり。これは何者のしわざぞとて、大に御氣色かはれり。大相國いまだ木下藤吉郎殿にて御座の時、お機嫌あしきはさる事ながら、當年より諸國をかたはしどりになさるべき瑞相なりとありければ、これにて御腹立やみぬ。案のごとく、そのとしより國々をしたがへたまひきとかや。

○同信長公へ、諸大名おの／＼元日の出仕ありつる座敷にて、仰せあるやう、こよひの夢にいづくともなく出陣のこゝちして、一宿よろひて馬に乗ると思ひつれば、乗りたる馬の足、四つながら折れて、危うかりし體を見たはと御誕あるに、誰も有無の返答なし。又藤吉郎殿とりあへず、千秋萬歳の御夢なるべし。そのゆゑは、合戦をなさるゝたび、いつもかち武者の御名一天にとらせたまふべき御告とこそ存候へとのたまひしが、まことに戦のあるとなれば、勝ちたまはぬはなかりき。

○古道三信長公へ始めて御禮に出らるゝ、進上に扇子二本もたせられし。御前に候人みなあらせ少のいたりやといふ氣色なりき。時の奏者に言上あれ、これは目出たう日本を、御手の内に握らせ給ふやうにと。

○元日いまだ夜ふかきうち、萬物をうりかふ人、えびすをもとめむかふる事は、聖徳太子よりさだまされり。さるにより町々をもちて、わかえびす／＼と呼ぶ。これをのぞむ者うけてよろこぶ。彼のえ



びすのはん木をする者、いろく人のたうとむほどのすがたをおこしてもちたりしが、しはすのいそがはしきにやとりまざれけん、えびすと思ひて持出しけるが、三途河のむばをすりたるを取り違へ賣りありきぬ。明方にうくるもの、見付け、これは異な姿やといふを、賣主も見ればむばなり。肝を消しながら、おくれぬ顔していふやう、これこそえびすのおふくろにて、殊更にめでたしと祝ひければ、げにもくわかえびす殿も、おふくろがなうてはいかであらん。福のみなもとこれなりとよろこびて、いたゞきをさめけるとなん。

○若狭の太守武田殿、無縁の出家をか、へ置かれ、寺など建て憐愍あさからず。されどもその家の事を知る人正路ならず、何を送らるゝも或は半分、或は三分の一つかはし、中にて残す。彼の會下僧もよく知りながら、さすが國主へ申上べきよしもなかりしに、ある年の暮正月の菓子に胡桃を千送れとあり。然るを、五百八十やりたり。僧不審に思ひ、一首の狂歌を參らす。

下さるゝくるみの數も君が代も目出たかりけり五百八十  
大守代官をめし出し、くはしくせんさくあれば、あやまる處紛れなかりつれども、これは祝儀の歌をよまれし僧の心を感じる條、今度の科ばかりはゆるすとありし。

○商人のならひにて、正月は藏の口に必ず鯛をかくる例あり。これをなん傳へてかけこたひといふ。或者の藏に、目のぬけたる鯛をかけておけり。亭主元日の朝見つけ、大に機嫌をそこなふ時に、こごさ

かしき中ゐの出でて、ことしこなたのお仕合は残る事なし。何事もおめでたいといはうたり。

○或人福をいのりのため、はつせの觀音に一七日參籠しけるが、やうやく六日めの夜半ばかりに、俄に我ひだりの足にはれものいで來て、ひたものくさりゆくを、こはそもいかんせんとかなしみ侍るうちに、夢なればさめてけり。あくるを遅しと宿坊にかへり、右のむねを語りければ、めでたき大悲の告夢なり。やがて利生におあしをくさるほどもち給はんとぞ申しける。嬉しげにて又こもりぬ。またする夜の夢に、兩の足に物いできて、左も右もくさるとおもひおどろきぬれば夢にてあり。件のむね又宿坊にかたれば、いよく福壽海無量の利生あらたに、れうそくをくさるほどもち給はんとぞいはひける。

○物いはひする商人ありて、初春の朝ごと、こぶかちぐりなどくわしを入れてすわる。そめつけのはちあり。宵よりつまのとりいでて下主に渡し、きれいにすゝぎてあけよといふに、何とかしけん、とりおとしてうちわりぬ。女房肝をつぶしあへり。あけぬればいつものちやのこいづるやと、亭主までもさらに出でず、そのまゝ氣色をそこなひ、女房を叱る時に、下主くだんのわれたる鉢をもちいでありのまゝにいひてけり。亭主あんにかはり、きげんをなほし、珍々重々なるかな、ことし我あきなひは八わりあらうすよといはうたり。

○桶結のありしが、元日の朝ふとおきく、女房のいひけるやうは、元三から大晦日までようゆひ事



をする人には、お身より外又二人ともあるまいぞ。やがて男そのゆひ事は、千あらうと萬あらうと、皆我がわるいからよといはうたれば、其年そこゝの仕合せ、くれぐれよかりき。

○江州甲賀大原の庄に菊田の玉木といふ者あり。正月のかんの箸に栗の木かたゝ、柏の木かたゝ、四角に削りて、親子三人祝ふ心は、九里四方にかしくふとの心なり。

○氏康公の城中にて、晝狐の鳴きたる事ありき。これはよからず忌む事なるにといふを聞きて、晝はきつねに鳴く蟬のから衣おのれゝが身の上なきよ

○京都六條の道場に、文閑といふ連歌の作者ありき。其親の名を惣吉とよぶ。或時彼惣吉火事にあへり。其砌文閑雄長老へ尋ねられたれば、長老出合せ、文閑に火事の噂を問うて後、

御親父の貧乏の神をやきはらひ惣吉事にやならんとすらん  
右の惣吉家やけてより後、一段仕合せなほり富貴なりしと。

○夢に卒都婆を見ると思ひ、さめて後わづらふ事あり。博士を呼びてうらなはせられたれば、卒都婆は木でしたる塔なるあひだ、祈禱をせられたらば、本復せんと祝うたり。

○江州かたといふ所の地頭へ、毎年大晦日に浦の百姓かならず鮎を二つづつあぐる例あり。或時一つあぐる。主人氣色かはり腹立するに、元日膳を出すをり、女房したゝめて持出で、今年は猶もふなをりせんと云ふまゝ、彼の鮎のどうばねを二つに折りて參らせけり。

○古相國駿河の御城出來たるいはひに、三百韻の連歌興行なされし時、板倉六右衛門入道正佐卷頭の發句に、

なみ木たゞ花はつぎゝのさかりかな

とありければ、相國大に御感ありて、乃ち其懷紙をもたせのぼせ、玄旨法印へ見せ參らせられしにも、稱美斜ならず候ひし。されば右の發句ことばの縁にたがはず、御子孫はん榮のめでたさ、もつとも祝ひすまいた。



此草紙は、いまだ櫻のみどりこの、年は十になり給ふといふ春御  
 父周防守殿の前にて、わがよむを如何にも神妙に聞きおはしま  
 す風情、梅檀は二葉よりの感に堪へて候ひきに、又かこひにて茶  
 をたてられ給うたるしほらしさいふはかりなければ、生ひたゝ  
 せたまひて目出たう榮え、するはんえいあるべきいろまでも床  
 しく見及び、此書をかきて贈り侍るめり。

前誓願

安樂老

寛永五年三月十七日

板倉侍從殿 參

元和元年之頃、安樂庵咄を所望いたし承候へば、別而おもしろく  
 存るに付て、御書集候て草子にいたし給候やうにと申候處、一兩  
 年過八冊に調給候紛失可仕かと存奥に書付置也。

寛永五年三月十七日

重宗



滑稽本集終

大正元年十月廿二日印刷  
大正元年十月廿五日發行

滑稽本集

〔非賣品〕

（個製本）

編輯者兼  
行輯者

國民文庫刊行會

東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作

東京市神田區雉子町三十二番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

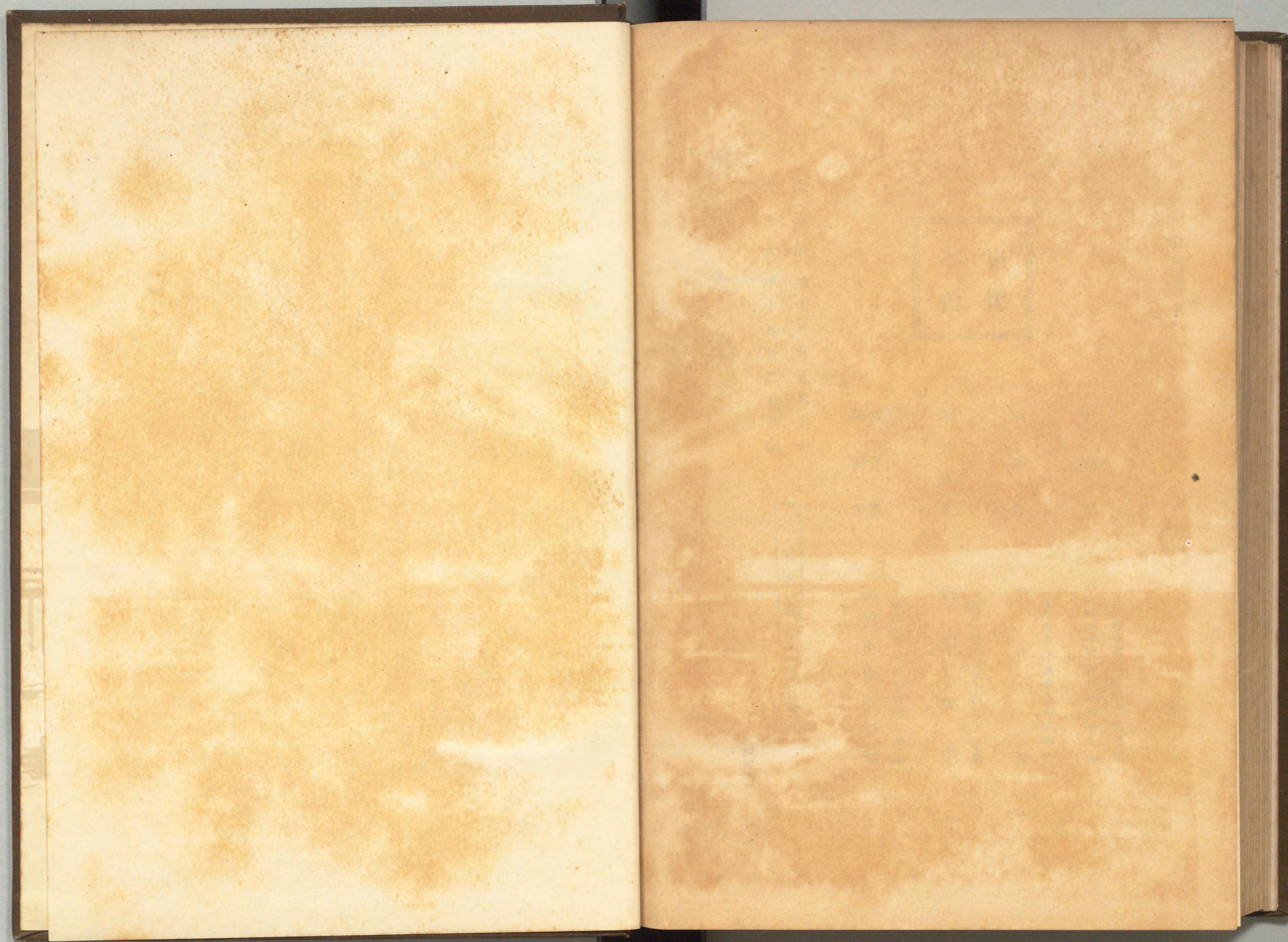
印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場  
東京市本所區番場町四番地



不許  
複製





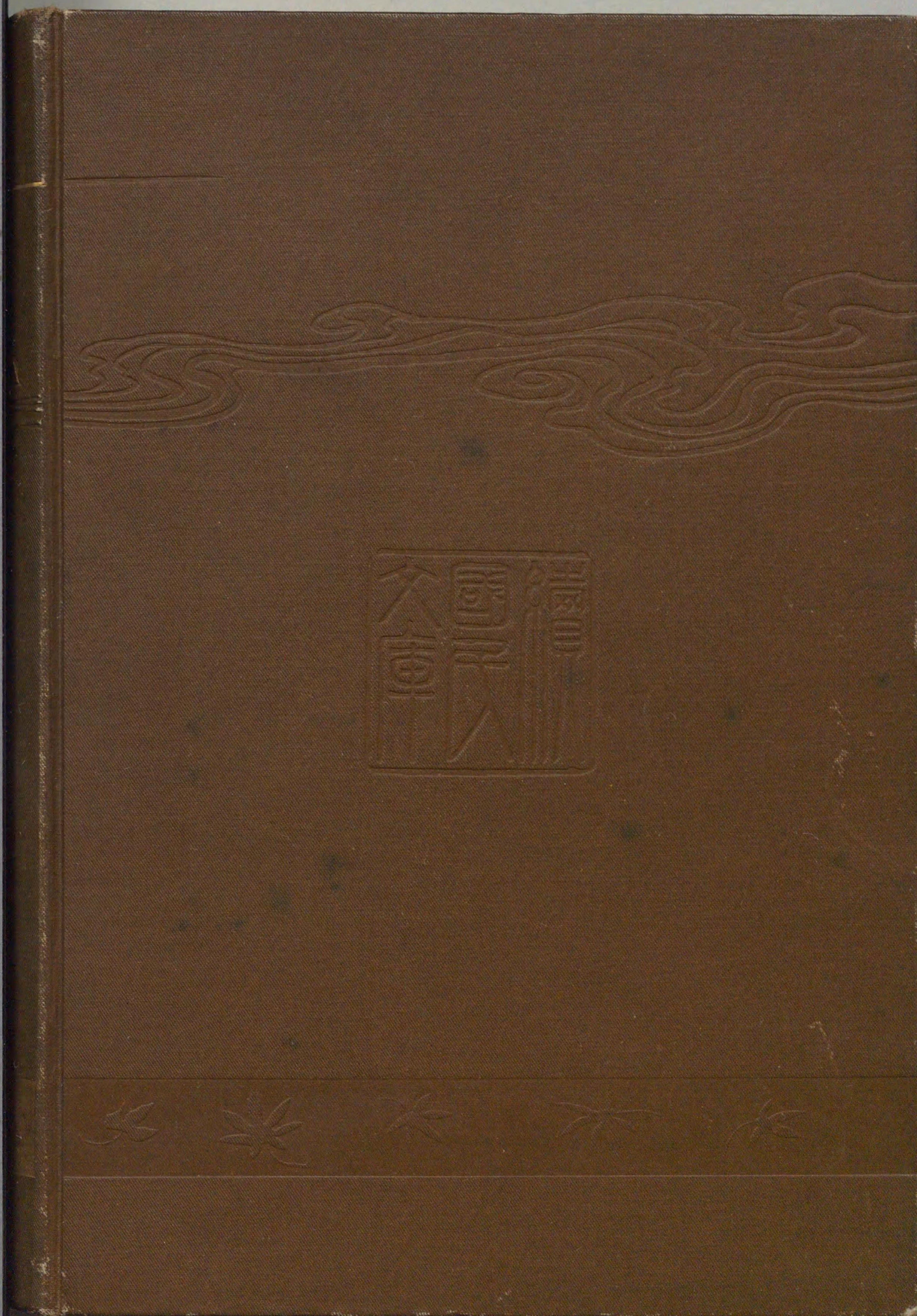


四

四







天  
人  
之  
道